

英国人画家

パースンズが
明治中期の

彦根

米原
長浜

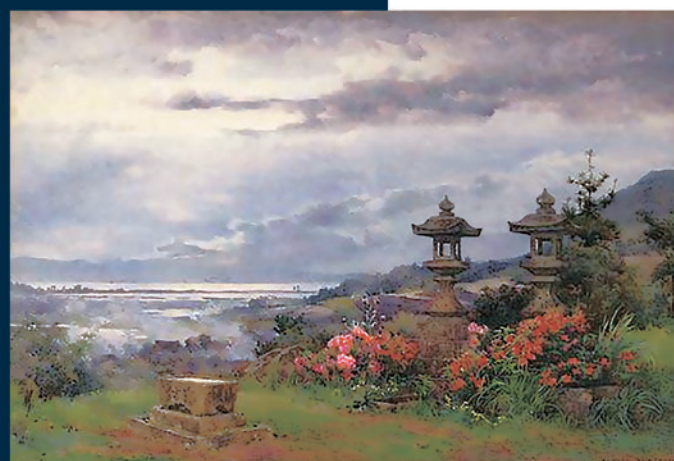
描いた

滋賀大学彦根キャンパス総合研究棟〈土魂商才館〉1階
しがだい資料展示コーナー

第1期 明治25年の彦根(Ⅰ) 一玄宮楽々園、彦根城、レンゲソウ畑、芦川での競馬、馬芝居
会期 2018年10月2日(火)～11月30日(金)

第2期 明治25年の彦根(Ⅱ) 一天寧寺、十六羅漢像、ササユリ
会期 2018年12月4日(火)～2019年1月31日(木)

▶第3期 明治25年の米原と長浜
一曳山祭、青岸寺、旅芝居の座長
会期 2019年2月4日(月)～4月26日(金)



A Garden of Roses, Watercolours by Alfred Parsons, RA

2019年2月4日発行

<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm>

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1

編集・発行: 滋賀大学経済経営研究所

英国人画家 パーソンズが描いた 明治中期の 彦根・米原・長浜

イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズ Alfred Parsons(1847-1920)は、1892年(明治25年)に来日し、早春から晩秋にかけて日本各地を旅行しながら、日本の植物と風景を組み合わせた水彩画を数多く描いた。パーソンズは、のちに英国オールド・ウォーターカラー・ソサエティの会長を務めることになる画家であり、また庭園の設計家としても活躍した人物である。さらに、彼は、日本の美術界にとって、明治中期以降、三宅克己、大下藤次郎、丸山晚霞を初めとする日本の水彩画家たちに大きな影響を与えた点でも忘れることのできない芸術家である。

パーソンズは、明治25年の5月19日から約1か月間、彦根に滞在した。5月末まで楽々園・地震の間に宿泊し、城山に登ったり玄宮園を描いたり、また、芹川で行われていた競馬や、街中で興行されていた馬芝居を見物している。その後、6月19日まで天寧寺にホームステイして、境内や裏山で出遭ったツツジやササユリ、ノイバラなどの植物、寺から眺めた琵琶湖の夕景色などを描き、寺の家族とも親しく交流した。

秋には、米原に宿をとって青岸寺の庭を描いたり、長浜まで出かけて曳山祭を見物し、祭りの様子を詳細に記録している。

帰国後に発表した日本紀行文 *Notes in Japan* (単行本、1896年刊)において、パーソンズは、彦根・米原・長浜のその当時の景観、そして人々の暮らし

などを、写実的な水彩画・スケッチと細やかな文章とで生き生きと描写している。

本展示では、明治中期における上記の3つの町の風景、植生、人々の生活ぶりなどを、*Notes in Japan* に多数収録されているパーソンズの精妙な画、また彼が綴った克明な文章、その他の関連資料によって紹介する。

展示は、以下のとおり、3期に分けて行う。

第1期：「明治25年の彦根（Ⅰ）—玄宮楽々園、彦根城、レンゲソウ畑、芹川での競馬、馬芝居」

第2期：「明治25年の彦根（Ⅱ）—天寧寺、十六羅漢像、ササユリ」

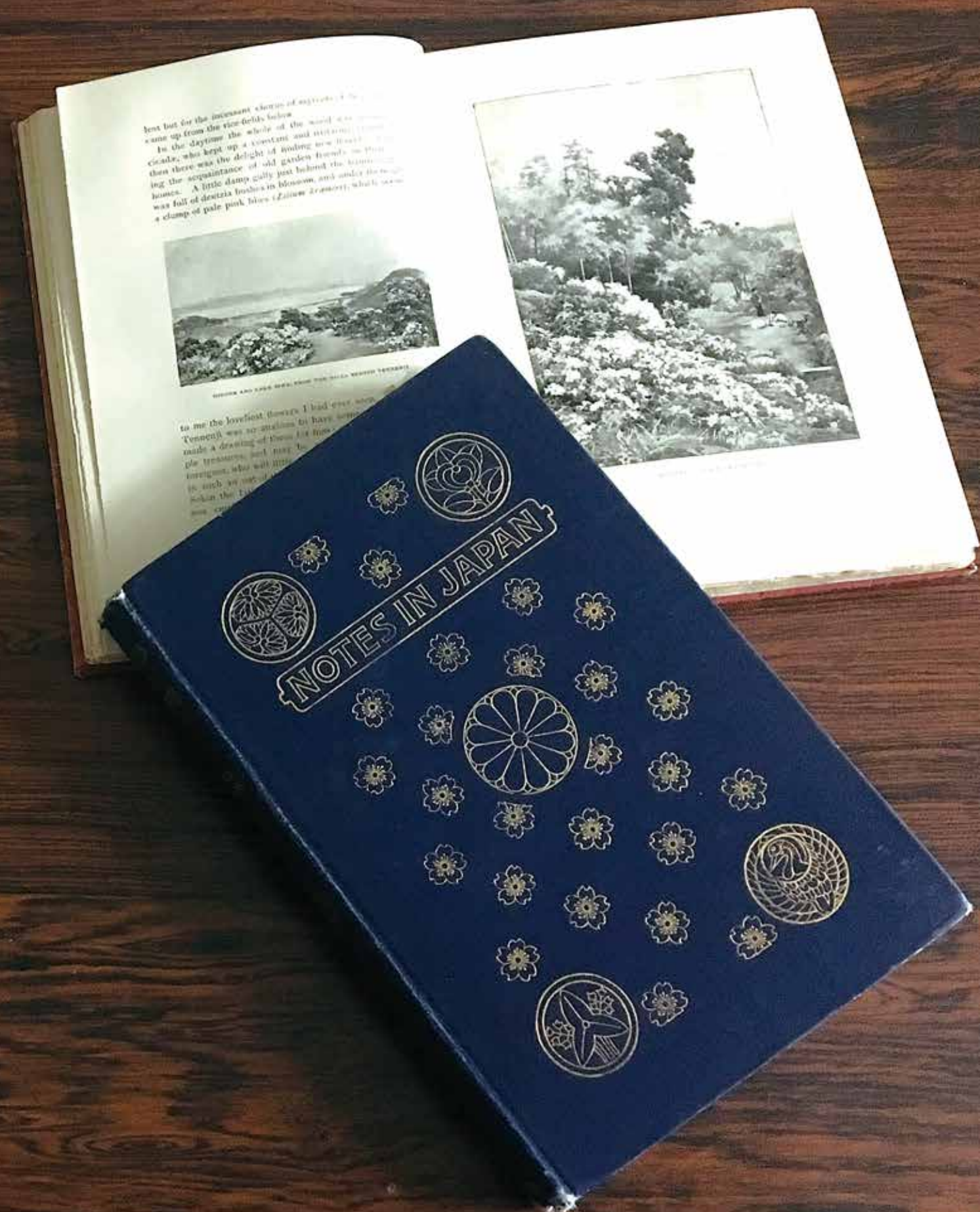
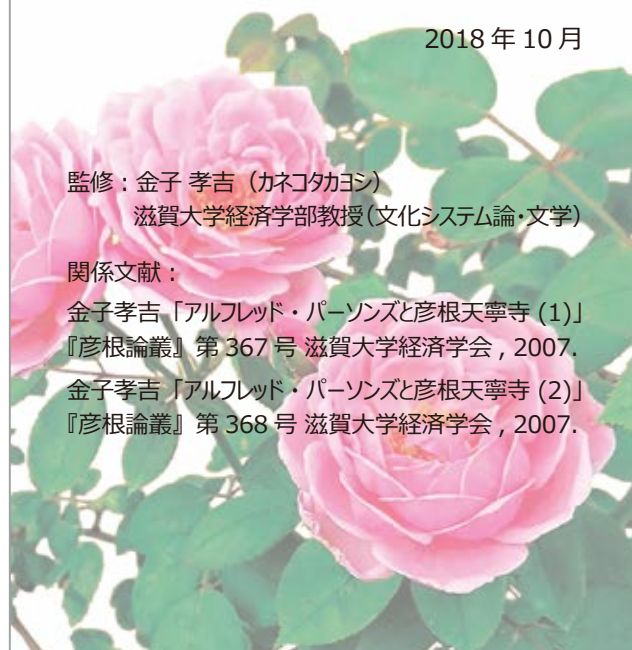
第3期：「明治25年の米原と長浜—曳山祭、青岸寺、旅芝居の座長」

2018年10月

監修：金子 孝吉（カネコタカヨシ）
滋賀大学経済学部教授(文化システム論・文学)

関係文献：

金子孝吉「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺(1)」
『彦根論叢』第367号 滋賀大学経済学会、2007。
金子孝吉「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺(2)」
『彦根論叢』第368号 滋賀大学経済学会、2007。



アルフレッド・パーソンズ

略年譜

- 1847 年 12 月 2 日 イギリス西部サマセット州ベッキントンで、外科医の父のもとに 14 人兄弟姉妹の第二子として生まれる。
- 1865 年 (18 歳) ロンドンに出て、郵便局に勤務しながら、サウスケンジントン・スクール (美術学校) の夜学に通う。
- 1868 年 (21 歳) 英国美術家協会展に初出品。
- 1871 年 (24 歳) ロイヤル・アカデミー展に初出品 (1874 年以降、亡くなるまで毎年出品)。
- 1882 年 (35 歳) ニュー・ウォーターカラー・ソサエティの正会員になる。
- 1884 年 (37 歳) ウスターシャー州ブロードウェイに、アメリカ人画家ジョン・S・サージェント、E・A アビー、F・D・ミレット、アメリカ人小説家ヘンリー・ジェイムズ、文芸批評家エドモンド・ゴスらとともに芸術家コロニーを築く。
- 1885 年 (38 歳) 画廊ファイン・アート・ソサエティで個展を開く。
- 1887 年 (40 歳) ロイヤル・アカデミー展に出品した作品「花笑い鳥歌うとき」が国家買い上げ作品に選ばれる (パーソンズの代表作の一枚となる)。
- 1891 年 (44 歳) 画廊ファイン・アート・ソサエティで個展を開催。アメリカの雑誌『ハーパーズ・ニュー・マンズリー・マガジン』に挿絵を寄せる。画家 F・D・ミレット、P・ビグローとともに、ドナウ河を旅する (このときの紀行文がミレット著『ドナウ河紀行』として、1893 年にアメリカのハーパー社から出版される。パーソンズは、ミレットとともに挿絵を担当)。
- ▶1892 年 (45 歳) 3 月～ 12 月にかけて日本各地を旅行。初夏に約 1 ヶ月、彦根に滞在する。初めは楽々園に宿泊し、のちに天寧寺に移る。天寧寺では、住職の高木宗欣、妻・おしげ、息子・喜三郎と親しく交流する。秋には米原に宿泊し、長浜の曳山祭を見物したり、青岸寺の庭園を描いている。11 月下旬にパーソンズの滞日作品展が東京美術学校で開催される。のちに日本を代表する水彩画家となる三宅克己がこの展覧会を見て、多大な影響を受ける。



1897 年頃のアルフレッド・パーソンズ (J.H. ローラー撮影)

- 1893 年 (46 歳) ロイヤル・アカデミー展に作品「天寧寺の石仏たち」を出品。画廊ファイン・アート・ソサエティで、滞日作品展「日本の風景と花の水彩画展」を開催する。
- 1894 年 (47 歳) 雑誌『ハーパーズ・ニュー・マンズリー・マガジン』に、この年の 6 月から翌年の 5 月にかけて、6 回に分けて日本紀行文 *Notes in Japan* を発表。
- 1895 年 (48 歳) W・パートリッジ、C・タドウェイと共同で、庭園デザインの仕事に取り組み始める。
- 1896 年 (49 歳) アメリカのハーパー社から、単行本 *Notes in Japan* が出版される。
- 1897 年 (50 歳) ロイヤル・アカデミー準会員に選出される。
- 1898 年 (51 歳) ロンドンのパーソンズ宅を三宅克己が訪問。
- 1903 年 (56 歳) 水彩画家・大下藤次郎の訪問を受ける。
- 1905 年 (58 歳) オールド・ウォーターカラー・ソサエティ正会員に選出される。
- 1910 年 (63 歳) 著名な園芸家エレン・ウィルモットのバラ図譜 *Genua Rosa* (バラ属) の出版が始まる (パーソンズは同著内のすべてのバラの絵を担当)。
- 1911 年 (64 歳) ロイヤル・アカデミー正会員に選出される。
- 1912 年 (65 歳) 天寧寺の高木喜三郎と書簡を交わす。
- 1914 年 (67 歳) オールド・ウォーターカラー・ソサエティ会長に就任する。
- 1920 年 (72 歳) 1 月 16 日、イギリスのウスターシャー州ブロードウェイで死去。

(谷田博幸「画家パーソンズが日本にみようとしたもの」、『100 年前に描かれた彦根—イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズの話』彦根景観フォーラム, 2007 をもとに作成)



FUJI OVER THE RICE-FIELDS OF SUZUKAWA



A LITTLE TEMPLE AT NIKKO

パーソンズの 日本旅行の足取り

1892 年 (明治 25 年)

3 月 9 日、長崎港に到着。その後、瀬戸内海を船で航行。
3 月半ばから、神戸に滞在 (神戸クラブ)。
4 月 13 日から、奈良に滞在 (宿泊先：菊水屋)。
4 月 25 日、吉野へ桜を描きに行く (宿泊先：たつみや)。
5 月 4 日、初瀬へ (長谷寺で牡丹の絵を描く)。
5 月 9 日、奈良へ戻る (宿泊先：菊水屋)。
5 月 19 日、奈良を発ち、宇治を經由して、彦根に夕方到着 (宿泊先：楽々亭)。
5 月末、宿泊先を天寧寺に移す。
6 月 18 日、パスポート更新のため、彦根を去り、神戸へ戻る。
6 月末、名古屋を經由して、鎌倉へ。
7 月 9 日、横浜を発ち、宇都宮を經由して日光へ行く。
8 月初旬、富士山に登頂する。
9 月初旬、富士吉田へ。甲府、諏訪を訪れ、中山道を通って妻籠へ向かう。その後、山越えて飯田へ。
9 月 16 日、浜松に到着。
9 月下旬、神戸に戻る。須磨、明石、有馬を訪ねる。
10 月 6 日、神戸を発ち、米原へ。
10 月半ば、長浜へ数日間通って曳山祭を見物。
10 月下旬、静岡から久能山、清水、熱海周辺を旅行。
11 月初旬、横浜に滞在。箱根を訪ねる。
11 月下旬、上野の東京美術学校 (現・東京芸術大学) で滞日作品展を開催。
12 月 10 日、横浜港から日本を出国。



The last of Japan



A TEA-HOUSE AT KAMAKURA



MIKOMORI JINJA, A SHINTO TEMPLE NEAR YOSHINO

illustration : Alfred Parsons

第3期： 明治 25 年の米原と長浜

— 曳山祭
青岸寺
旅芝居の座長

On the 6th of October..... a new passport had come, which gave me permission to wander for three months longer through the provinces near the Tokaido, and Matsuba once more left his wife and family to follow my fortunes.

Our destination was Maibara, a little town on Lake Biwa, not many miles from Hikone. As I passed it by rail I had noticed that the flooded fields on the margin of the lake were covered with a blue-flowered water-plant, a good foreground to the blue water and the distant mountains, and I hoped for blue skies to complete the picture, but they came only at rare intervals.

パーソンズ、 洪水で水浸しになった 田圃とミズアオイを描く



ミズアオイ (草津市立水生植物公園みずの森 (指定管理者: 近江鉄道ゆうグループ) 写真提供)

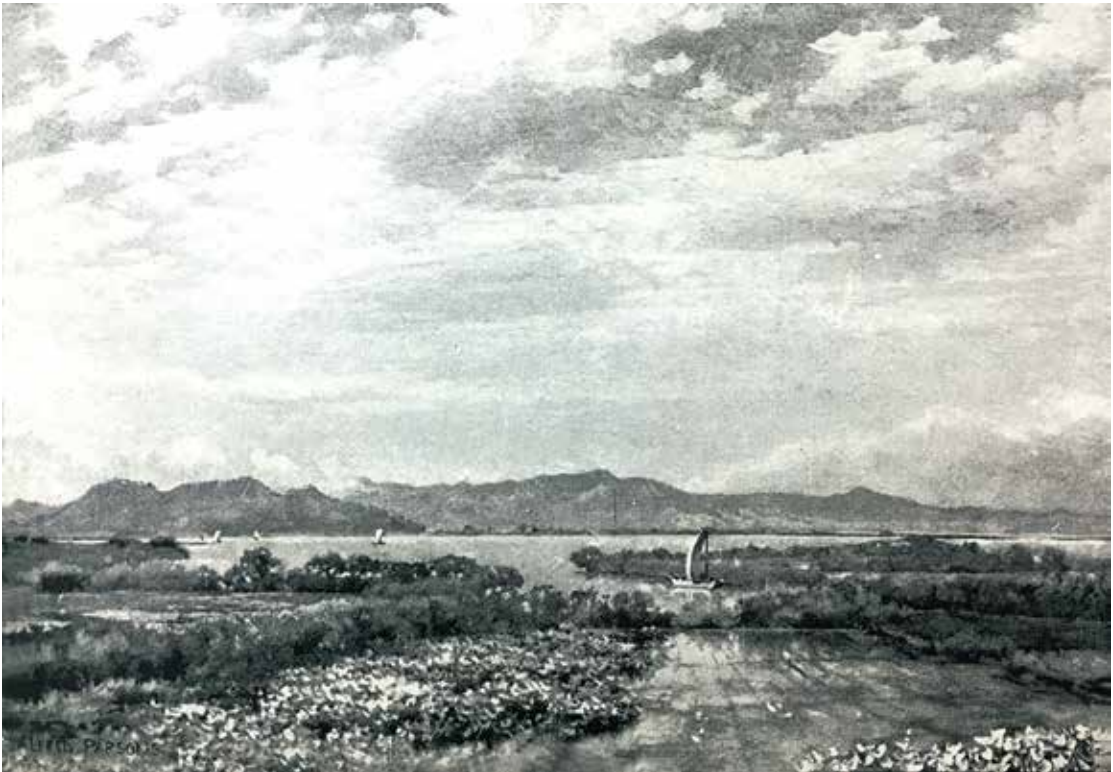
ロンドンで開催されたパーソンズの滞日絵画展のために作成されたカタログで、彼は入江内湖とその岸辺の水に浸かった田圃に群生していたミズアオイについて、「琵琶湖近くの幾つかの小さな沼や、洪水のために水浸しになっていた田圃は、この時期、一面、水草（ミズアオイ）の、紫がかった青い花々で覆われていた」と記している。ミズアオイは、水湿地に生息する一年生の水草で、9 月～ 10 月に青紫色の一日花を咲かせる。以前は、水田や沼、湿地などで広く見られたが、現在では、除草剤や田圃の基盤整備などの影響により、絶滅が危惧されるほど数が減少している。



BLUE WATER-WEED (青色の水草)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*,
New York: Harper & Brothers Publishers,
1896.

十月六日、……新しいバス
ポートが届き、私は、さらに
三ヶ月間、東海道近辺の幾つ
かの県を旅行してもよいという
許可を得ることになった。……
そして、松葉〔訳注：パーソンズ
が雇ったガイド兼通訳〕は、今一
度、私の波乱多き旅に付き添
うために、彼の妻と家族にし
ばしの別れを告げた。
私たちが目指したのは、彦根
から数マイルも離れていないと
ころに位置する米原、琵琶湖
の畔にある小さな町である。

私が彦根の町を列車で通り過
ぎたとき、湖沿いにある田圃
は、洪水が起こったせいで水浸
しになっていたが、田圃一面が
青い花の咲く水草〔訳注：ミズ
アオイのこと〕で覆われているこ
とに気づいていた。のちに、青
色の湖と遠方の山々とを背景に
して絵を描く際、群生するそ
の水草は、格好の前景となった。
絵を完成させるため、私は空
が青く晴れ渡るのを願ったが、
そのような天気は、ほんの稀に
しかやってこなかった。



LAKE BIWA WITH FLOODED RICE-FIELDS, NEAR MAIBARA (洪水で浸水した田圃と琵琶湖、米原付近)

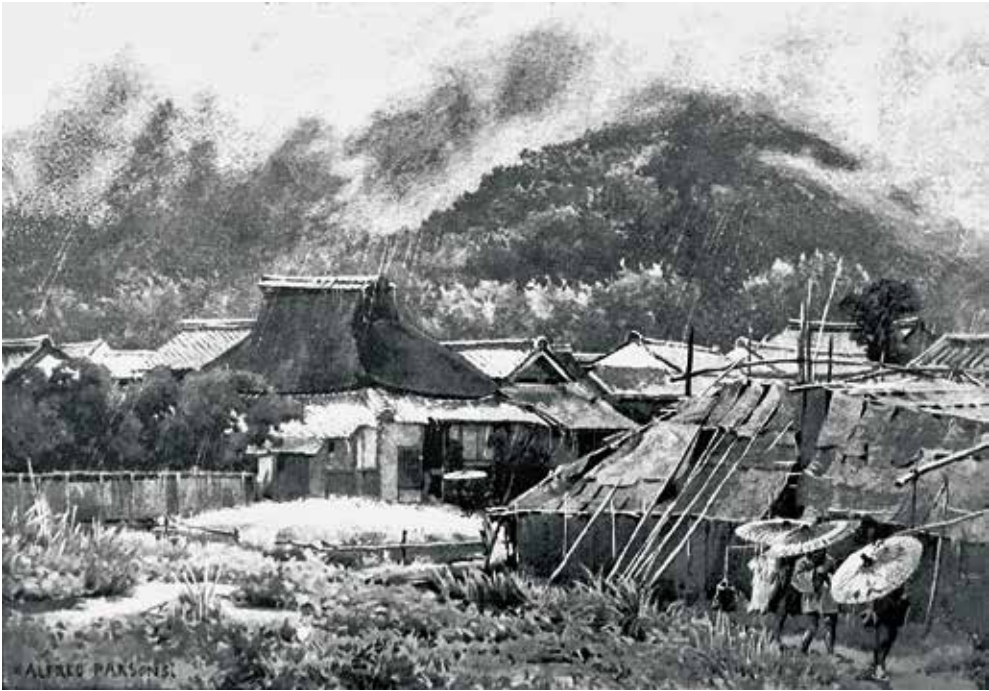
左側の山並みは物生山、右側に長く続く山並みは磯山であり、その手前に広がる湖は入江内湖である（入江内湖の干拓工事は、昭和 19 年、第 2 次大戦中の食糧増産のための国営事業として着工され、昭和 24 年に完了した）。明治 25 年当時の入江内湖とその周辺を描いたこの画では、数隻の船が湖上に浮かび、画面手前の右側には水に浸かった田圃、画面の真中から左手前にかけて、ミズアオイの群生が描かれている。

illustration: Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.



上の洪水風景の画は、描かれて
いる二つの山並みのかたちと
それらの重なり具合から、赤い
点のあたりで、矢印方向を向い
て描かれたと推察される。

二万分一之尺正式図「彦根」、明治二十六年測図、国土地理院



パーソンズの記述によれば、彼が米原に滞在していた間、ほぼ毎日雨が降っていたようだが、この画でも、背後の山が濃い霧に包まれ、3人の人物が大きめの雨傘をさしている光景が描かれ、さらには、降り注ぐ雨の細い線も描き込まれている。

THE TRAVELING THEATRE, MAIBARA (旅芸人の芝居小屋、米原)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*,
New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

On a piece of waste ground near my tea-house a travelling theatre had been erected, a structure of bamboo poles with mats hung over them, which was not calculated to keep an audience dry, and not once during my stay were the company able to give a performance. The manager occupied the room next mine; he was an excellent performer on the samisen, and a pious man withal. Every morning from seven till half-past he said his prayers, repeating in a monotonous singsong voice a sentence which sounded to me like "Ya ya yura no," and tapping two blocks of wood together to keep time. He belonged to the

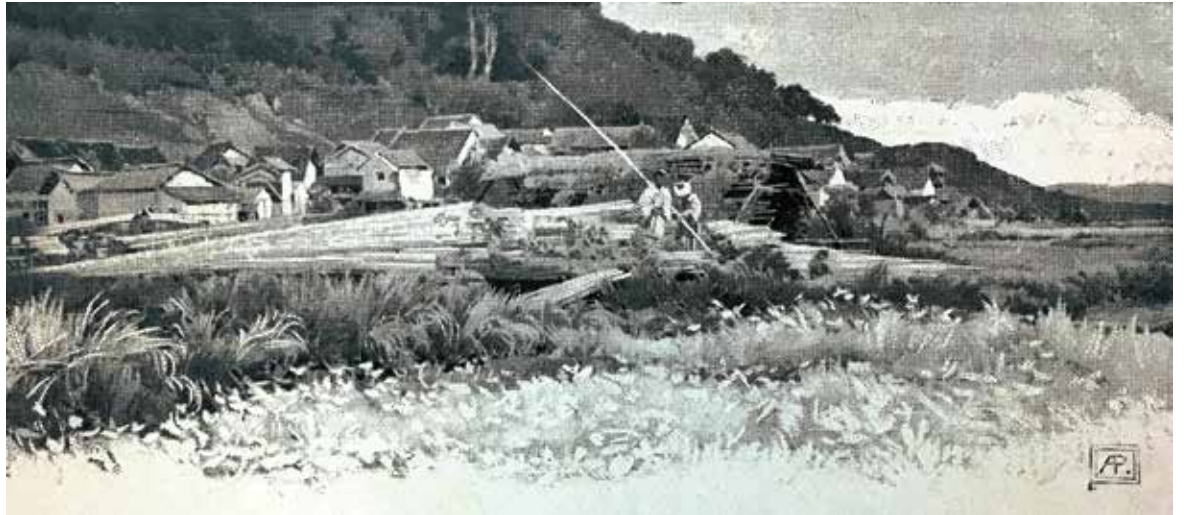
Shingon sect of Buddhists.....

We soon became good friends, the manager and I, and he spent many hours in my room drinking tea, looking at my sketches, and in such conversation as my rudimentary knowledge of the language permitted, but unfortunately I never had an opportunity of seeing him act. When I left he presented me with a printed cotton towel in an ornamental wrapper, and I gave him a penny black-lead pencil, and we parted with mutual expressions of esteem.

旅芝居の座長 —— パーソンズ、旅芝居一座の座長と交流する

私が泊まった宿の近くの空き地の一画に、旅芝居一座の小屋が建てられていた。小屋は竹程ちくかんを組み合わせて造られていて、それらの竹程には莫蔭が数多く掛けられていた。だが、莫蔭が掛けられたぐらいでは、雨が降った際に、観客たちを濡れないようにするのは難しかった。そのため、私が米原に滞在していた間、小屋で芝居が上演されることは一度もなかった。座長が泊まっていた部屋は、私の部屋の隣りにあった。座長は三味線の優れた弾き手で、そのうえ信心深い男だった。毎朝七時から七時半まで、彼はお経を唱えていた。座長は、抑揚のない読経調で一つの文言を繰り返していた。その文言は私には、“Ya ya yura no.”といつているように聞こえた。また、拍子を合わせるために、二つの木塊を同時に叩いていた。彼が属していたのは、仏教の一派である真言（Shingon）宗だった。……

私たち、座長と私は、すぐに親しい友人となった。彼は私の部屋にやってきては、お茶を飲んだり私のスケッチを眺めたりして何時間も過すのだった。そのとき交わされた会話は、もちろん、日本語についての私の初歩的な知識が許してくれる程度のものであったが、不運なことに、私は彼が役を演じている姿を見る機会に恵まれなかった。私が米原を去るとき、彼は、絵柄が印刷された木綿の手拭いを、きれいな模様の包装紙の中に入れて私にプレゼントしてくれた。一方、私のほうは、安物ではあるが黒鉛筆を贈ることにした。私たちは互いに相手を尊敬していることを伝え合いながら、別れを告げた。



A BAMBOO YARD AT MAIBARA(米原の竹置き場) Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

パーソンズは、日本の「竹」にとくに深い関心を抱いていた。彼は、天寧寺滞時に、境内にあった「竹林」を描いていたし、米原でも、たくさんの「竹稈」を組み合わせて建てられていた「芝居小屋」と、上図の「竹置き場」を描いている。さらには、長浜祭で見た、托鉢僧たちの被る、竹で編まれた網代笠もスケッチしている（12 頁参照）。竹は、緯度の高いヨーロッパ地域には自生していなかったことから、パーソンズにとってはやはり稀少で、描く価値のある題材だったのである（17 頁の A.B.Freeman-Mitford : *The Bamboo Garden* も参照）。

日本では、竹は、昔から様々な用途に利用されてきており、数多くの生活用品——籠や笊、熊手や箒、物干し竿、簾、扇子・団扇・和傘・提灯、物差し、箕、釣竿など——の材料となってきた。プラスチックが発明されるまでは、日本人にとって竹は日々の暮らしを成り立たせるうえで欠かせないものだったのであり、竹の需要は非常に大きかった。明治中期、米原に「竹置き場」があったというのは、現在の私たちからすると、なぜなのかと思ってしまうかもしれないが、竹が当時果たしていた重要な役割を考えれば、竹置き場は実は日本のあちこちで見られるものだったと考えられる。



A.B.Freeman-Mitford: *The Bamboo Garden*, London, Macmillan, 1896. (個人蔵)
illustrated by Alfred Parsons

Near Maibara there were large orchards of persimmons with brilliant-colored fruit, which, as Andrew Marvel says of the oranges, "hang like gold lamps in a green night." They were particularly beautiful in the well-designed garden of Seigwanji, where I made some sketches. It is a fine example of a temple garden, and some massive evergreen oaks form an impressive background to the gray stones, the carefully trained pines, and the trimly clipped shrubs; but except for the persimmons, a few reddening maple leaves, some late blooms of platycodon, and the scarlet berries of a little ardisia, it was all green and gray.

THE TEMPLE GARDEN, SEIGWANJI(青岸寺の庭園)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*,
New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

画面左側に、丸い実をつけた柿の木が描かれている。



青岸寺の庭園（2018年5月19日、経済経営研究所撮影）



MINIATURE PAGODA IN THE TEMPLE GARDEN, SEIGWANJI
(青岸寺、寺院の庭園内にある小塔)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*,
New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

青岸寺—— パーソنز、青岸寺庭園内で色づいた柿の実に出逢う

米原の近くに、柿の木が植えられた大きな果樹園が幾つかあり、木々には見事に色づいた果実がなっていた。その柿の木は、^{*}アンドリュー・マーヴェルがオレンジの実を詠ったときのように、「緑色の夜の中で、黄金色に輝くランプのごとき実をつけていた」“hang like gold lamps in a green night.” 柿の実は、青岸寺の見事に設計された庭園の中にあると、とりわけ美しく見え、数枚のスケッチを私はその庭で描いた。青岸寺の庭は寺院庭園の素晴らしい見本であり、庭の前景をなしている灰色の石組や、念入りに剪定された松の木、きれいに刈り込まれた低木に対し、こんもりと茂った数本の常緑の檜の木が、実に印象的な後景を形づくっていた。とはいえ、柿の木と、紅葉し始めた楓の木数本と、桔梗の幾つかの咲き残り花と、矮小なヤブコウジの緋色の実を別にすれば、あとはすべて緑色と灰色だった。

〔* 訳注：Andrew Marvell (1621-1678) は、イングランドの十七世紀の詩人・政治家〕

パーソنزの文章中に引用されている「緑色の夜の中で、黄金色に輝くランプのごとき実をつけていた」“hang like gold lamps in a green night” は、アンドリュー・マーヴェルが作った詩 “*Bermudas*” の中の一節。17 世紀のイギリス人たちにとって、大西洋上にある、サンゴ礁に囲まれた島々からなる温暖で緑豊かなバーミューダ島は、洋上の楽園と見なされていた。常時花が咲き乱れ、オレンジやメロン、バナナなど、多くの種類の果実がたわわに実り、湾では魚が捌み放題のこの島こそ、ヨーロッパの人々が憧れていた〈ヘスベリデース〉（西方の洋上楽園）ではないかと思われていたのである。

パーソنزが、ここでマーヴェルの詩の一節を引用しているのは、照葉樹の濃緑色の葉の中に、オレンジのような、輝かしい黄金色の柿の実をつけている島である日本が、〈西方の洋上楽園〉であるバーミューダ島に対して、新たに発見された〈東方の洋上楽園〉であることを言い表そうとしているのではないかと考えられる。

This annual festival takes place in the middle of October, and seems to be a gathering-ground for all the country-side. In many respects it was very like a country fair in England, but the main event on all the three days is the perambulation of large triumphal cars, called yama, on which companies of children give dramatic performances. I was fortunate in having a brilliantly fine day, and as I bowled along the five miles of level road from Maibara in a kuruma with two good runners, I passed troops of people in holiday attire, old peasants, gayly dressed young girls, and wandering friars with huge bamboo hats that looked like bushel baskets. The town was gayly decorated with flags and with lanterns bearing the device of the city, and crowds were pouring into it by road and rail and boat ; for Nagahama is a busy port at the northern end of Lake Biwa, and a regular service of steamers runs between there and Otsu, at the southern end. This mixture of things ancient and modern in Japan always seems

amusing, especially when, as in Nagahama, there is not much of the modern. The row-boats which came in with their loads of passengers were of unvarnished wood, decorated with black patterns on the bows, and, except the police and the railway officials, I saw very few men in European dress ; there certainly were no women in anything but their own becoming costume, During the afternoon I walked round the town, first to the Buddhist temple, the great hall of which was crowded with people sleeping, eating, and praying, and then up the long avenue leading to the Shinto temple of Hachiman. It was lined with stalls and booths for refreshments of all kinds, with conjurers, purse - trick men, lucky wheels, quack-medicine venders, and so on, and near the big granite torii and lanterns were the market-gardeners with dwarf pines, oranges laden with fruit, camellias, and other trees. One had nothing but orchid-plants, none of them, unfortunately, in flower.

曳山祭—— パーソンズ、祭で賑わう長浜の町を訪れる

この祭は、毎年十月中旬に開催される。長浜の周辺にあるすべての地域の住民がこの祭を見に来まってくるようだ。この祭は、多くの点でイギリスのカントリー・フェアによく似ている。ただし、三日間の祭を通しての最大のイベントは、ヤマ（yama）と呼ばれる、大きな戦勝凱旋車（triumphal cars）の巡行である。そして、そのヤマの舞台の上で、子供たちだけからなる一座が芝居を演じるのである。祭が行われた日がきれいに晴れ上がった天気恵まれたことは、私にとつてまことに幸いだった。私は、有能な二人の車夫が引くクルマ（kuruma）に乗って、米原から五マイルの距離がある平坦な道を、あたかも滑っていくかのように、長浜へ向かつて進んでいた。途中、晴れ着すがたの大勢の人々の脇を、私は通り過ぎた。それは、年老いた農夫たち、華やかな着物を纏った少女たちだった。また、竹製の大きな帽子をかぶった、行脚中の托鉢僧たちもいた。彼らの帽子はブッシェル籠（bushel baskets）にそっくりだった。長浜の街は、数多くの幟や、町の紋章が描かれたたくさんさんの提灯で飾られていて、華やいでいた。祭を見ようと、見物人たちの群が、道を歩き、また汽車で、あるいは船に乗って、長浜の町なかを目指してなだれ込んでいた。いま、船に乗って、と書いたが、長浜には、琵琶湖の北の端に位置する賑わっている湊があり、長浜と、湖の南の端にある大津との間に、蒸気船が定期的に運航されているのである。このように、古いものとモダ

ンなものが日本では入り交じって存在していることが、いつもながら面白く思われる。長浜のように、モダンなものがあまりたくさん見られない町の場合には、とくにそうだ。乗客を大勢乗せて湊に入ってきた漕ぎ船は、ワニを塗っていない木で造られており、舳先は、黒色の模様で飾られていた。警察官と鉄道員を除けば、男たちで西洋風の衣服を着ている者はほんの僅かだった。一方、女性たちはといえば、彼女たちによく似合っている和服すがたの者しかいなかった。……

午後の間、私は町中を歩き回ってみた。まずは、仏教寺院へ。寺院の大きなホールは、たくさんの人々で溢れかえっていて、眠っている人たち、食べている人たちもいれば、祈っている人たちもいた。そのあと、八幡神社（Shinto temple of Hachiman）へと通じる長い通りを歩いてみた。その通りには、あらゆる種類の軽食を売る屋台や露天がずらりと並んでいた。そこには、手品師たちや、財布マジックを行う男たち、回転する「運命の輪」（Lucky wheels）を使って福引きをさせる者、怪しげな薬売りたちなどもいた。花崗岩で造られた大きな鳥居（torii）と、立ち並んでいる燈籠の近くでは、植木商たちが店を開いていて、矮小な松の木や、果実のついた蜜柑の木、椿の木などが売られていた。植木売りの一人はラン科の植物だけを商っていたが、残念なことに、どれも花を咲かせてはいなかった。



パーソンズが「ブッシェル籠」に似ていると記した、托鉢僧たちが被る「竹製」の笠。

SOME HATS AT THE NAGAHAMA MATSURI(長浜祭で見かけた幾つかの帽子)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.



琵琶湖博物館に展示中の復元丸小舟
出典：『季刊 湖国と文化 第 90 号』、(財)滋賀県文化振興事業団、2000.

パーソンズが記している「乗客を大勢乗せて湊に入ってきた漕ぎ船」は、江戸時代から昭和初期頃まで琵琶湖水運の主役を務めていた〈丸子船〉である。その舳先が「黒色の模様で飾られていた」というのは、船首部分に目立つ〈伊達鑑〉^{だてかすがい}のことをさす。丸子船の舳先は、ヘイタと呼ばれる縦板を樽状に接ぎ合わせて造られるが、そのヘイタの継ぎ目から水が入り込まないようにするために、油でといった墨を塗って黒くなった銅板を〈かすがい〉として数多く貼り付け、ヘイタ同士をしっかりと接合していた。舳先部分に見える独特の「黒色の模様」は、その鑑がつくりだした模様であるが、のちの時代になると、装飾的な役割を担う、いわゆる〈伊達〉鑑になったという。



両儀運送店引札 運送各地飛行便取扱 明治 26 年
出典：『明治一五〇年 長浜の近代化』、長浜市長浜城歴史博物館、2018.



長浜汽船湖東丸図 明治時代
出典：『明治一五〇年 長浜の近代化』、長浜市長浜城歴史博物館、2018.

長浜の町で、「旧いもの」に「入り混じって存在している」「モダンなもの」としてパーソンズが挙げているのが、蒸気機関車と蒸気船である。上の「両儀運送店引札」は明治 26 年のもので、黒煙を吐く蒸気機関車、それに乗り込んでいる洋装の運転士と車掌、背後に洋風の駅舎の一部が描かれている。下の「長浜汽船湖東丸図」は、明治 11 年に建造された木造蒸気船・湖東丸を描いた錦絵。客室や船上に、大勢の乗客や水夫らの姿が描き込まれている。

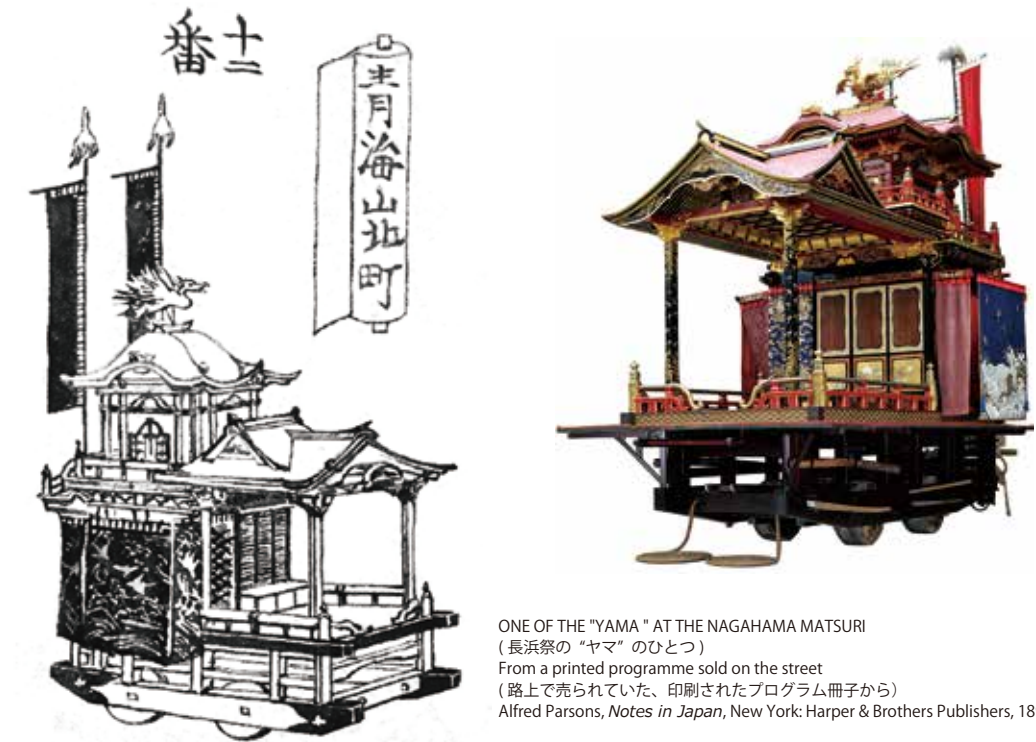
I was the only foreigner in the town. My landlord had been thoughtful enough to engage a place for me in a tea-house opposite which the yama stopped and gave a performance : all the partitions had been removed, and the floor, divided into squares by low movable railings, was covered with family parties who had brought their own cushions and provisions. My heart was filled with covetousness as I saw the fine old lacquer bento boxes which they produced after carefully removing many silk wrappings. There are twelve yama in the town, each owned by a different guild or society, the members of which teach the children their parts, provide dresses for their play, and accompany the yama on the festival days. The cars are huge things, taller than most of the Japanese houses, and quite fill up the narrow streets ; they are built on solid wooden wheels, and are dragged about

by strings of coolies, the young men of the guild dancing and shouting in front of them, waving fans by day and lanterns after dark to direct the coolies' movements, while the older members follow in white-curtained carts. The wood-work around the stage is lacquered, gold and black and red, with elaborate brass ornaments, and the pagoda-like roof which covers it is of burnished gold, surmounted with a dragon or phoenix or other mythical animal. The part behind the stage is enclosed with hangings, Chinese embroideries, Persian rugs, or silk brocades, and two of them had fine pieces of Flemish tapestry, which must have come over with the Dutch centuries ago ; the buxom ladies and knights in armor looked odd, and yet pleasantly familiar, and my heart went out to the expatriated strangers, so lonely amid that Eastern crowd.

曳山祭—— パーソنز、巨大で豪華な山車を見る

私は、この町にいたった一人の外国人だった。私が泊まっている宿の主人は、たいへん気がきくことに、ヤマが止まって芝居を演じる場所に面している茶店の中の一席を、私のために予約して取っておいてくれた。その茶店の戸などの仕切りはすべて取り外され、茶店の床は、持ち運び可能な低い柵によっていくつかの升席が設けられていた。それらの升席は、数家族の一行で満員となっており、彼らは自分たちで座布団を持参し、弁当も用意してきていた。いくつもの絹製の包み〔訳注：風呂敷〕が丁寧に開けられ、その中から、漆塗りの古風で美しい弁当箱が取り出されるのを見たとき、私は心底それが欲しくてたまらなかったといえる。この町には十二のヤマがあり、それぞれが、異なったギルド（guild）または社中によって所有されている。そのギルドのメンバーである大人たちが、子供たちに、当てがわれた役をどう演じるかを教え込み、また、子供たちが身に着ける衣装を揃えてやり、さらには、祭が行われる三日のあいだずっとそのヤマに付き添うのである。山車は巨大なものだった。その高さは、日本のほとんどの家屋のそれを越えていた。巨大な山車が通ると、町の狭い通りは、山車ですっかり埋められてしまいそうだった。山車は、頑丈な木製車輪の上に組み立てられていて、人夫たちが引つ張る綱によつて、町内のあちこちへ曳かれていく。

ギルドの若い男たちは、山車の前で踊ったり叫んだり、昼には扇を、暗くなつてからは提灯を動かして、人夫たちの山曳きを指揮している。一方、年配の男たちは、白い幕のかかった小さな運搬車〔訳注：後山〕に乗つて（in white-curtained carts）、そのうしろについていく。舞台の周りにはある木製の高欄と柱には、金色、黒色、赤色の漆が塗られ、手の込んだ精巧な真鍮の鍔金具の装飾も施されていた。舞台の上を覆っている、仏塔（pagoda）に似た屋根は、光沢のある黄金製で、その上には龍か鳳凰（phoenix）あるいは神話上の動物の像が載っていた。舞台の背後部分の山車の周りには、いろいろな掛け物、たとえば中国風の刺繍やベルシャ絨毯、あるいは絹の錦織りの幕が掛けられていた。錦織の幕の中の二つは、フランドル製の見事なタピストリーだった。それらは、数世紀前にオランダ人たちとともに海を渡ってきたに違いない。タピストリーに描かれていたふくやかな西洋婦人たちと、甲冑に身を包んだ西洋の騎士たちとを、こうした所で見かけるのは奇妙な感じがした。にもかかわらず、私にとつては親近感を覚えるものなので、嬉しくもあった。東洋人の群衆の中に、唯一の西洋人として取り囲まれている私としては、西洋から離れ、はるばる東洋まで渡ってきた婦人たちと騎士たちの身の上に、心から同情を覚えるのだった。



ONE OF THE "YAMA " AT THE NAGAHAMA MATSURI
(長浜祭の“ヤマ”のひとつ)
From a printed programme sold on the street
(路上で売られていた、印刷されたプログラム冊子から)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

青海山の曳山（山車）。
（長浜市曳山博物館写真提供）

「長浜祭の“ヤマ”のひとつ」と題された北町の青海山の山車の画は、パーソンズ自身が書き記しているとおり、「路上で売られていた、印刷されたプログラム冊子」の中にあった図を見て、彼が描いたものである。明治25年秋に行われた長浜祭で出番となっていたのは、6基の山車だった。高砂山（外題は、「楓狩巧利酒 妹背山御殿場」）、翁山（同、「玉簾芹生薫 菅原寺子屋」）、万歳楼（同、「截結智緒乱 三代記」）、寿山（同、「迦塩波鯉口 忠臣蔵三」）、常盤山（同、「漲川育鳥叫恋糸露一節 朝顔宿屋」）、猩々丸（同、「誠一若木勲 和田合戦」）の6基である。青海山は、この年には祭に出場していなかった——前年の明治24年には出番となっていて、「親子恩愛鞭 重ノ井子別レ」を演じている——のであるが、パーソンズは祭の際に購入した「プログラム」冊子中に掲載されていた青海山の図をもとに、*Notes in Japan* 用の挿絵スケッチを描いたのである。なお、曳山祭の歴史を見てみると、明治19年から明治26年までは（明治21年と22年を除き）山車は6基ごとに隔年で開催することになっていた。また、祭が行われる季節も、明治26年までは10月だった（明治27年以降は4月の開催となった）。



（長浜市曳山博物館写真提供）

パーソンズが見た翁山の見送り幕（左図）と鳳凰山の見送り幕（右図）。翁山に掛けられている「二人の武将図」のタピストリーは、平成7年に復元新調されたもの。原本は重要文化財で、16世紀後半のフランドル（現ベルギー）製。鳳凰山の見送り幕は、同じく16世紀後半に、ブリュッセルで製作されたもので、こちらも重要文化財。トロイヤ戦争物語を描いた5枚1組のタピストリーのうちの1枚「出陣するヘクトールと妻子の別れ図」とされている。

In front of each stage hung a bunch of "gohei," the twisted strips of white paper which are the universal emblem of the Shinto religion, the only simple things among the masses of gorgeous color, and they seemed to give the key-note to the whole ; for Shinto is, above everything else, an ancestorworship, a religious respect for the country and for the men whose heroic deeds still inspire its people, and the short dramas which the children acted were all founded on old stories—how Yoritomo's son sacrificed his life to save the young Mikado, and other well - known motives from Japanese history. The boys were admirably trained and beautifully dressed ; they rolled their eyes and grimaced in exactly the same way as their elders of the profession, and the crowd vigorously applauded their facial contortions. In one company there was a little mite of two years old ; he had not to speak at all, only to cry out once or twice, but he knew his part as well as the rest, and always looked up at his boy father at the right moment.....

As evening approached, all the yama began to collect in the square in front of another Shinto temple, where the great Hachiman car with colossal swords, and the

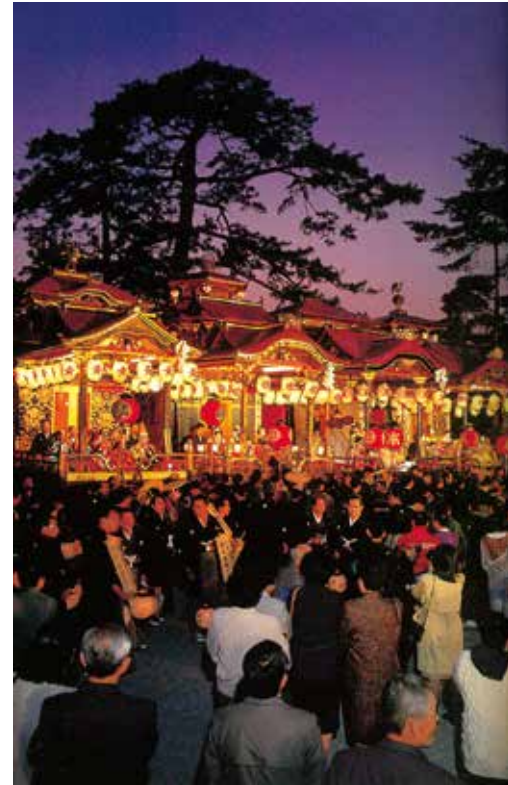
Mikoshi, a shrine carried about on men's shoulders, were already placed. In the river on one side of this square many boats were moored, spread with rush mats and with the red blankets which have become so common in Japan, and in them people were picnicking; over the bridge which crossed it the unwieldy structures were dragged from the town by shouting crowds ; each in turn gave a final performance in front of the temple, and was then drawn aside to make room for the next. This began at half-past five, and it was eleven o'clock before the last of them had been ranged with the others to the right of the temple steps. As night came on they were covered with big lanterns, the stages were lighted by lamps in glass shades, and attendants with candles on long sticks illuminated the face of each little actor while he was speaking. When the six gorgeous yama with their attendants and gayly dressed performers were all drawn up in line against a background of solemn cryptomerias, with an excited crowd dancing and waving lanterns in front of them, the spectacle was more beautiful than any words of mine can suggest.

曳山祭——山車の舞台上で演じられる子供歌舞伎を観る



明治 32 年（1899）の戻り山 御旅所 出典：『長浜市史 第 6 巻 祭りと行事』、長浜市役所、2002.

ヤマのどの舞台の上にも、「御幣」（“gohei”）と呼ばれる、白い紙を捻じった細長い房が取り付けられていた。それは、この国の人たち皆にとって神道（Shinto religion）を象徴しているものなのであり、この祭の他のすべてが絢爛豪華な色彩で溢れている中であって、唯ひとつ素朴なものであった。だが、この御幣こそが、祭全体の基本をなしているものであるように思われた。神道とは、ほかの何にも増して祖先崇拜であり、この国とその英雄たちとに対する宗教的尊敬の念である。英雄たちの行いは、いまなおこの国の人々を勇気づけているのであつて、祭で子供たちが演じる短いドラマも、すべて、古くから伝わる、英雄たちの物語に基づいているのだった。たとえば、頼朝の息子が若きミカド（Mikado）を救うために自分の命を犠牲にしたことか、その他、日本の歴史上のよく知られた題材が演じられるのである。少年たちは称賛すべきほどよく訓練され、また纏っている衣装も美麗なものであった。子供たちは眼の玉をぐるりと回したり、顔をわざとしかめたりしていた。それは、彼らの仲間である年長の者たち大人の歌舞伎役者たちが行うのとまったく同じやり方であった。



パーソンズが感激して眺めた、曳山祭の夜の情景
出典：『曳山のまち』、長浜曳山祭保存会、1995.



子供歌舞伎（2002 年 4 月 15 日、澤居清隆氏写真提供）

〔十五頁から〕

集まった観客たちは、子供たちが顔を歪ませるたびに、拍手喝采して盛り上がった。あるヤマの一座の中には二歳のお稚児も含まれていたが、その子は台詞を発する必要はなく、ただ一度か二度大きな声で叫ぶだけでよかった。しかし、その子でさえ、他の演じ手の子供たちと同様、自分の役回りをよく心得ていて、父親役の演じ手のほうを、そうしなければならぬ瞬間には必ずしっかりと見上げるのだった。……

夕暮れ近くになつて、すべてのヤマが、もう一つの別の神社〔訳注：御旅所〕の前にある広場に集まり始めた。広場には、すでに、巨大な太刀を何本も積んだ大きな八幡車（Hachiman car）〔訳注：長刀山のこと〕と、男たちの肩によつて担がれる聖櫃であるミコシ（Mikoshi）とが置かれていた。この四角い広場の一边には川が流れていたが、その川にはたくさんの舟が停泊していて、人々はその中で莫座や、日本でよく見かけられるようになっていく赤い毛氈を広げ、ピクニックを楽しんでいるかのように食事をしている。その川に架かっている橋の上を、叫び声をあげる曳き手たちによつ

て町中から曳行されてきた、御するのがこの上なく厄介そうな巨大構造物が渡っている。神社の前で、それぞれのヤマが最終の演技を順番に行い、演じ終わると、次のヤマのために場所をあげるため、広場の脇のほうへ引き下がる。ここでの舞台は、五時半に始まったが、順番が最後のヤマが神社の階段の右側には、もう十一時近くになっていた。夜になつて暗くなると、ヤマの周りには、たくさん大きな提灯が灯され、舞台はガラス・シェイドのランプの光で明るく照らされた。付添人たちが、長い棒の上に蠟燭を数本灯し、それを使つて、小さな演者たちが一人ひとり台詞を話すあいだ、めいめいの顔を明るく照らしていた。付添人たちと華やかな衣装を着た演じ手たちとが乗った六基のゴージャスなヤマが、杉の巨木を背にして一列にきちんと立ち並び、また、ヤマの前で、興奮した群衆が踊ったり提灯を揺り動かしていたとき、この祭の光景は、私がどんな言葉をもつても到底伝えることができないほど美しかった。

挿絵・その他—— パーソンズ、職業・画家



A Garden of Roses, Watercolours by Alfred Parsons, RA, Commentary by Graham Stuart Thomas, OBA, Salem House Publishers, 1987. (個人蔵)

イギリスの著名な園芸家エレン・ウィルモット Ellen Willmott (1858－1934) の *The Genua Rosa*. 1910－1914 (『バラ図譜』) のために、パーソンズは彼女の庭に咲いていた数多くのバラを描いている。バラ研究者 Graham Stuart Thomas がその中から 70 点を精選し、原画を忠実に再現した図版集として 1987 年に出版した。

パーソンズが描いたバラ図は、バラの種類ごとに、花卉や雄蕊・雌蕊、葉の表と裏、茎にある棘などを、植物学的に細部に至るまで精確に描いている。しかも、図鑑にありがちな、過度に解剖学的になることがなく、実にナチュラルに美しく表現されていることから、バラ愛好家たちから高く評価されている。



The Danube, From the Black Forest to the Black Sea, by F. D. Millet, Illustrated by the Author and Alfred Parsons, New York, Harper & Brothers, 1893. (滋賀大学附属図書館蔵)

1891 年の晩夏、パーソンズは、友人のアメリカ人画家フランシス・ディビス・ミレット (1846－1912) と旅行家・著述家のポルトニー・ビゲロー (1855－1954) の 3 人で、ドイツ南部の「シュヴァルツヴァルト (黒い森)」から、ドナウ河が海に注ぎ込む「黒海」河口まで船で旅をしたが、そのときの紀行文。この『ドナウ河紀行』を著したのはミレットであるが、挿絵は彼自身とパーソンズの二人が担当している。中央の写真の 3 人の男性は、左にパイプを銜えながら座っているのがパーソンズ、真ん中に立っているのがビゲロー、右側に腰掛けているのがミレットである。右の挿絵は、オーストリアのメルク修道院で、パーソンズが描いたもの。



A.B.Freeman-Mitford: The Bamboo Garden, London, Macmillan, 1896. (個人蔵)

本書は、禅宗庭園に深い関心を抱いていたミットフォードが、日本や中国、北米、ヒマラヤなどで見られる様々な種類の竹について研究した成果を纏めたもの。書中に収められた竹の絵をパーソンズが描いている。

フリーマン＝ミットフォード (1837－1916) は、英国の外交官・政治家・著述家。イギリス公使館書記官として 1866 年から 1870 年まで日本に滞在し、明治維新前後における日本との外交交渉で重要な役割を果たした。日本に関する著作がいくつかあり、*Memories by Lord Redesdale*, London, Hutchinson & Co., 1915 (長岡祥三訳『英国外交官の見た幕末維新』〔抄訳〕講談社学術文庫、1998 年)、*Tales of Old Japan*, London, Macmillan, 1871, *The Garter Mission to Japan*, London, Macmillan, 1906 (長岡祥三訳『英国貴族の見た明治日本』〔抄訳〕新人物往来社、1986 年) などがよく知られている。



アルフレッド・パーソンズの肖像写真 (市田左右太撮影) のレプリカ (滋賀大学経済学部附属史料館蔵)

パーソンズが来日した明治 25 年に市田^{そうた}左右太 (1843－1896) によって撮影された写真。市田は明治時代に活躍した著名な写真師で、神戸の元町に洋館の写真館を構えていた。これまでパーソンズについての文献資料等でこの写真が掲載されたことはない、貴重な写真である。この写真のオリジナルは、天寧寺でパーソンズが親交を結んだ高木喜三郎家が所有していたが、「水彩画家 アルフレッド パーソンの事」(1953 年) という論文を発表した元滋賀県立短期大学教授の故島戸繁氏が、高木氏の家族から許可を得て、高木家にあったパーソンズの肖像写真を撮影 (複写) したと推察される。このレプリカの写真は、島戸氏のご子息から本学経済学部附属史料館に寄贈されている。